

## エミリ・ブロンテの詩について

真 田 時 蔵

エミリ・ブロンテの文学を考える時には、彼女の生涯と作品とのかかわりが意識される。しかし、エミリ・ブロンテの伝記研究は、近年新しい資料が発見されるということもなく、それぞれの伝記作家の解釈に独自性がみられる程度にとどまっている。Katherine Frankの*Emily Brontë*などが好例であろう。こうした動向のなかで、エミリ・ブロンテの作品を対象とした文学研究は、小説 *Wuthering Heights* をめぐる研究はむろんのこと、彼女の詩についても多くの研究成果が認められる。それは Fannie Elizabeth Ratchford をはじめ、Laura L. Hinkley, Mary Visick, Clement King Shorter などによる Gondal saga の再構成の試みに負う<sup>1</sup>ところが大きい。とりわけ C. W. Hatfield の *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* はエミリ・ブロンテの研究に大きな貢献をした。エミリの文学を理解する重要な手掛かりとして Gondal saga の再構成に注目が集まっている観があるが、現段階ではその全貌を明確にしえていない。

エミリの詩を理解するうえで、シャーロット、ブランウェル、エミリ、アンによって創造された空想物語の世界にできるだけ近づく作業の必要性もいわれてきている。それは、『若者たち』(“Young Men”), 『お仲間』(“Our Fellows”), 『島の人々』(“Islanders”) にはじまる。それらの物語はエミリが8才から9才にかけてかかわったものである。その後それらの物語は、シャーロットとブランウェルの「アングリア」(“Angria”) とエミリとアンの「ゴンドル」(“Gondal”) の物語へと発展していった。「ゴンドル」の再構成の試みとしては、Ratchford と Hinkley では、ヒロインについての見解に大きな相違があるが、*Charlotte and Emily* のなかで Hinkley が再構成しているものが説得力がある。いずれにしろ Winifred Gérin の “Nourished on the sheer romance of Scott’s novels and Byron’s poetry, it was not

surprising that Emily Brontë should find the prototype for her ideal of womanhood in the heroines of the former and recognize in them kindred spirits, parallel figures to her own, in their fight for an independent existence.”<sup>(1)</sup>という指摘は正鵠を射ているといっている。1831年シャーロットがミス・ウラーの学校に入学し家を離れたことから、ブロンテきょうだいの物語が Angria と Gondal の物語に分かれ、エミリとアンは「ゴンドル」の空想世界をふくらませていくことになった。主導的役割を担ったのはエミリであった。しかし、エミリが展開した「ゴンドル」のストーリーとアンとのそれは、それぞれが独自に想像の翼をひろげて楽しんでいた結果創造されたものである。ふたりは書き記したストーリーを語り合うことはあっても、全体の統一・整合性を考慮したとは考えられない。のちに1841年1月から1844年にかけて、エミリ・ブロンテは“The Death of A. G. A.”という詩を書く。この題名が示す通り「ゴンドル」の主人公オーガスタの死を扱っている。しかしエミリはこの主題の詩を書きながら、この物語と平行して、内面告白詩も書いている。このような詩稿の進めかたは彼女の晩年まで続く。エミリの遺した詩稿のうち、いずれが「ゴンドル」に属するかという解釈をめぐるのは、F. E. Ratchford と Laura L. Hinkley などのすぐれた研究があるが、Hinkley の “Not all narrative poems are Gondal poems; a number are found in the non-Gondal notebook.”<sup>(2)</sup> という指摘がある。エミリには Gondal saga といわれることになった構想があったことは疑いの余地はないが、この saga を完結するという意欲が強かったとは思われない。エミリの詩稿には、物語詩と内面告白詩の両方の様相をもつものがあつたとするのが無難な解釈ではないだろうか<sup>(3)</sup>。Gondal saga にも物語詩に仮託してエミリが心情を吐露した部分が多いと見るべきだろう。

エミリの詩に触れて先ず感じることは、彼女が自己の特異性を意識していたことである。自分のもつヴィジョンだけでなく、自分が担っている運命が特異なものであるということに自覚していたと思われる。

So hopeless is the world without,  
The world within I doubly prize, (No.174)<sup>(4)</sup>

外の世界はあまりに絶望的だから、  
内なる世界を私は二重に大切にす。

I am the only being whose doom  
No tongue would ask, no eye would mourn;  
I never caused a thought of gloom,  
A smile of joy, since I was born. (No.11)

私は独りぼっち、私の運命を、  
誰も尋ねてはくれない。悲しんで見てくれる者もない。  
私は生まれてから周りの人に暗い思いをさせたり、  
歓びの笑みを浮かべさせたこともない。

このような詩句からも、エミリは他の人とは異なった生を享けた人間であるという自覚が読みとれる。そのことは彼女が詩句のなかで fate, destiny という語を14回使用していることにもうかがわれる。一般にエミリの神秘主義的傾向といわれたりしているが、エミリは自分が家族のシャーロット、ブランウェル、アンとも異なった人間であるという思いが強かったに違いない。それは“*My Comforter*”などに読みとれるエミリの識った靈感体験によるものであろう。それは Margaret Lane の言葉を借りれば“Some poets — Coleridge through opium, Wordsworth in his moments of mystical experience, Blake — have reached levels of intuition and expression with which ordinary life and consciousness have nothing to do; but Emily Brontë seems to have lived her whole creative life as poet and novelist at this level, without the aid of any drug beyond the obsessive daydream which all four children had variously created.”<sup>(5)</sup>”ということである。

シャーロットがふとしたきっかけで、エミリの詩稿を読み、三姉妹で詩集を出版することを思いたち、その計画をエミリに話したいきさつをシャーロットはつぎのように伝えている。

妹は詩が書けるし、書いていることを知っていたので、もちろん私は驚きませんでした。これにざっと目を通して見て、驚き以上の

何か私を捉えました。——これは普通の詩文でもなければ、女性  
 が一般に書く詩とも全く違ったものだという深い確信でした。それ  
 らは凝縮され簡潔で、生気があり純粹だと思われました。……妹エ  
 ミリは、感情をあらわに示す性格の持ち主でもなければ、一番身近  
 で親しい人でさえ彼女の心や感情の深奥に無断で押入るとただでは  
 済まされないような人でした。私は何時間もかかって私の発見に対  
 して彼女をなだめ、数日がかりでこの詩が出版に値するものだと説  
 得しました。

寡黙で控え目で、人に会うことをできるだけ避け、生涯にただ一度の  
 恋愛体験も持たなかった女性が、大胆に自己の内面を顕わした詩稿を読  
 んだ時、シャーロットが心を動かされたのは当然といえよう。シャー  
 ロットの言葉からもうかがえるように、注目すべきことは、エミリは自分  
 の詩を姉のシャーロットに見せることはおろか、出版するなどというこ  
 とは全く考えていなかったということである。ほとんど日記に近いもの  
 として、否、それ以上に自己の内面を記したものであったといえよう。  
 したがって、先に述べたように、のちにエミリ研究家から Gondal saga  
 と呼ばれることになった物語も、本来物語として完結しようとしたも  
 のではなく、自己の内面を表現するためのものではなかったかと思われ  
 てくる。

ブロンテ姉妹の詩集をシャーロットの発案で、匿名で発刊することに  
 エミリがシャーロットの説得に容易に応じなかった理由の一つは、エミ  
 リにとっては自分自身にとってのみ詩を書き記すことの意味があり、自  
 己の内奥の思いを記す行為そのことに意味を見出していたと考えられる。  
 今日、われわれが接することのできるエミリの詩のテキストは編者の手  
 が加えられている。彼女の詩稿に句読法の明瞭でないものもある。修辞  
 の細部に気を配らなかったからであろう。こうしたことから、詩稿に  
 こめられた彼女の思いを他の人に知られること、そしてその詩を理解し  
 てもらふことなど期待していなかったと考えられる。そうした思いのな  
 かで書かれた詩であったからこそ、エミリの詩には彼女の内面が誠実に  
 表現されていたといえよう。

エミリが詩作にこめた「内なる世界」を理解するためには、エミリに

大きな影響を与えた「外の世界」に先ず注目しなければならないだろう。エミリが彼女の「内なる世界」を容易にかい間見させなかったこと、異常なほど内気で、いわば世間なれせず、「外の世界」に警戒心を持っていたことは広く知られている。Katherine Frankが、エミリのそうした傾向を神経性食欲不振症として推測しているが、極度に内向的の性格であったことは、シャーロットの言葉などからもうかがえる。エミリのこうした性格形成は、ハワースの墓地に囲まれた牧師館で過ごしたことが大きく影響していると思われる。エミリが育ったハワースの牧師館の窓外に見える墓石は、幼いエミリの心に深く刻まれていた。

I see around me tombstones grey  
Stretching their shadows far away  
Beneath the turf my footsteps tread  
Lie low and lone the silent dead; (No.149)

私の周りの灰色の墓石が、  
遠くまでその影を延ばしているのが見える。  
私が歩む芝土の下に、  
死者がものいはず、低く、孤独に横たわる。

But it is doomed, and morning's light  
Must image forth the scowl of night,  
And childhood's flower must waste its bloom  
Beneath the shadow of the tomb. (No.14)

だが、それが宿命なのだ。朝の光は  
夜の荒れ模様を予示しなければならない。  
幼い日の花も、墓の影の下で、  
その花の盛りを枯らさねばならないのだ。

エミリの詩にはこのように tomstone(s), tomb(s)あるいはgrave(s)と  
いった言葉が多く用いられていて、合計25回、他に墓を表す意味で  
stoneが4回用いられている。このことは「墓石」が極めて印象深い光  
景であったといつてよい。したがって死に対する意識は、今日われわれ

が想像する以上のものであったと考えられる。それは死に対する恐怖心ともなっていたはずである。

And there he lay among the bloom  
His red blood dyed a deeper hue  
Shuddering to feel the ghostly gloom  
That coming Death around him threw —— (No.9)  
そして、彼の赤い血潮が一層濃く染めた  
花の間に彼は横たわり、  
近づく死が、彼の周りに投げかける  
不気味な暗闇を感じて、震え——

と、1837年3月6日の詩にエミリは記しているが、これは、「ゴンドル」に仮託して、彼女が自身の死の恐怖を伝えるものと受けとめられよう。Deathあるいはdeathは45回用いられているし、deadは16回用いられている。

ハワースは衛生環境の整備されていない村で、当時の水準からみても下水道設備などは劣悪なものであった。共同で使用されていた野外便所なども病気の温床であった。教会の墓地の位置も悪く、水質汚染の原因となっていた。このような不衛生な生活環境であったため、ハワースの死亡率は極めて高く、この村で生まれた幼児の半数近くが6歳以下で死亡していたといわれる。<sup>(7)</sup>1820年4月ブロンテー家が牧師館に移ってからは、3才になって間もないエミリと生まれたばかりの妹のアンは、両親とともに墓地を見下ろす二階の寝室を用いていた。1821年9月「ああ神様、かわいそうな子供たち、ああ、神様、かわいそうな子供たち」という悲痛な叫びとともに世を去った母親の死を体験している<sup>(8)</sup>。このようなことから死に対する恐怖心を常に持っていたと考えられる。また、その後二人の姉を失うという経験もしていることから、死の恐怖を一層つのらせていったことは想像に難くない。

シャーロットがのちにロー・ヘッドの寄宿学校でのエミリの様子を「妹のエミリは荒野を愛した。この上なく暗いあの荒野にも彼女にとってはバラよりも輝かしい花々が匂っており、鉛色の山腹のくぼみを、故

郷の楽園と見た……毎朝目を覚ますと、故郷の家と荒野の情景が彼女の心に急に浮かび上がり、それからの一日を暗い悲しいものにした。私のほか誰も何が妹を苦しめているのか知らなかった<sup>(9)</sup>と記している。エミリのこのような傾向を、単にホームシックという言葉では説明しつくせないのである。自分の周辺で幼い時から日常的に死を体験し、死の意識から逃れることのできなかつたエミリにとって故郷の荒野で触れる自然の生命の輝きは、特別な意味を持っていたと思われる。あとで触れることになるが、荒野の自然はエミリの魂の憩いの場所であり、楽園を象徴していた。しばしば引用されるつぎの詩句は彼女の思いをよく投影している。

For the moors, for the moors where the short grass  
Like velvet beneath us should lie!  
For the moors, for the moors where each high pass  
Rose sunny against the clear sky!

For the moors, where the linnet was trilling  
Its song on the old granite stone;  
Where the lark — the wild skylark was filling  
Every breast with delight like its own. (No.91)

荒野へ、荒野へ、そこには短い草が  
足もとにビロードのように生えている！  
荒野へ、荒野へ、そこには小高くなった道が  
澄みきった空に、日差しをうけて上っていく！

荒野へ、そこには紅ひわが、  
古びた御影石のうえでさえずっていた。  
そこでは、雲雀が——野の雲雀が、  
みんなの胸を自分の喜びと同じ喜びで満たしていた。

エミリはこの詩以外でも moor(s), moorland(s), moorside という言葉を用いて、全体では23回用いている。heathは10回、heather

は3回用いている。このことからエミリにとってmoorは格別の存在であったと考えられる。ガストン・バシュラールは「子供の無意識の心の中の母の胸と同じように暖かい母の乳房である<sup>(10)</sup>」とエミリにとっての荒野を説明している。エミリにとってmoorが魂の憩いの場としてかけがえのない場所であった。

I'm happiest when most away  
 I can bear my soul from its home of clay  
 On a windy night when the moon is bright  
 And the eye can wander through worlds of light — (No.44)

私がいちばん幸せなときは、  
 月かげさやかな風ふく夜、  
 魂が、土魂つちくれの身を遠く離されてさまよい、  
 目が、光の世界をさすらうことができるとき。

この詩にみられる soul の様相はエミリの詩の多くに読みとることができる。Soul(s), soul(s) という言葉は46回用いられているし、Spirit(s), spirit(s) の使用例は52回ある。エミリにとって人間のありようは、魂のありようであって、肉体はかりそめのもの、人間が人間としてこの世に存在するためには、いやおうなしに纏わなければならないようなものとして肉体を理解していたといえるだろう。「人間それぞれの肉体のなかに何が住んでいるのか/私たちの身にうちに、どんな憂鬱な客を宿らせているのか/苦悩と狂気、涙と罪——」(No.149) という認識をもつエミリにはほとんど肉体蔑視に近いものを感じとれる。また、死の恐怖心を幼くして抱懐することになったエミリは、肉体の死の不可避性を受容することから、魂の不滅性を信ずることへと心が動いたことは当然のなりゆきであった。それは死の恐怖心を克服するようすがともなり、彼岸への憧憬を強めていったと考えられる。永遠不滅の彼岸へたどりつけるのは肉体ではなく魂だけである。このようなエミリの思想は小説『嵐が丘』にも読みとることができる。たとえば、つぎにあげる Catherine の言葉には、エミリのヴィジョンが投影されている。



なんといっても、あたしがいちばんいやなのは、このこわれた牢獄  
みたいなあたしの肉体なのよ。このようなものに閉じこめられてい  
るのは、もうあきあきだわ。あたしは早くあの輝かしい世界へ逃げ  
て行きたいわ。涙を通してぼんやりとそれを見たり、痛む心の壁越  
しにそれにあこがれたりするんじゃないに、本当にあたしはそこへ  
行きたいの。<sup>(11)</sup>

肉体による囚われの意識と、魂の自由な解放を希求する気持ちは姉の  
シャーロットですら十分理解しえなかったのではなからうか。

And if I pray, the only prayer  
That moves my lips for me  
Is —— “Leave the heart that now I bear  
And give me liberty.” (No.146)  
そしてもし私が祈るとすれば——  
私のために唇を動かす唯一の祈りとは——  
「私が今耐えている心をそとして、  
私に自由を与えて下さい」

魂の自由があつてはじめて本当の意味での生を経験しようという確信  
がエミリにはあつた。1845年12月18日死を間近にひかえていたエミリが、  
家族の強いすすめにもかかわらず医師の医療までも拒み続けていたこと  
を思う時、エミリの心の内奥に秘められていた魂の自由への希求の念が  
いかに強いものであつたかはシャーロットにも理解し難いことであつた  
にちがいない。ジョルジュ・バタイユの言葉を借りれば、「毎日の水入  
らずの生活が彼女たちの心をひとつに結び合わせていたとはいえ、エミ  
リだけは、自分の孤独をもちつづけて、そこに彼女の想像からうみ出さ  
れる亡霊どもをひそかに養い育てていたのである。」先に述べたように  
エミリの荒野への異常なほどの憧れは、こうした彼女の心性によるもの  
である。もちろんエミリが詩句のなかで多用している spirit(s), soul(s),  
heart という言葉は、牧師であつた父から受けた教育抜きには考えられ  
ないことであろうが、エミリがそれらの言葉に日常親しんでいたという

だけでは、エミリの「魂」へのこだわりは説明しつくせないだろう。

'T was grief enough to think mankind  
All hollow, servile insincere;  
But worse to trust to my own mind  
And find the same corruption there. (No.11)

人はみなうつろで、卑屈で、不実だと、  
考えることは、まったく悲しいことだった。  
しかし、自分自身の心を信じながら、  
同じ墮落をそこに見てしまうことはなおさら悲しかった。

と、常に自己の内面を凝視するエミリは、自分が他の人とは異なった人間であるという自覚とともに、孤独感をも深めていったと思われる。そうした心境を既に27頁に第1スタンザをあげたが、前掲の詩の冒頭でつぎのように記している。

I am the only being whose doom  
No tongue would ask, no eye would mourn;  
I never caused a thought of gloom,  
A smile of joy, since I was born.

In secret pleasure, secret tears,  
This changeful life has slipped away,  
As friendless after eighteen years,  
As lone as on my natal day. (No.11)

私は独りぼっち 私の運命を  
誰も尋ねてはくれない。悲しんで見てくれる人もいない。  
私は生まれてから、周りの人に暗い思いをさせたり、  
飲びの笑みを浮かべさせたことはない。

ひそかな飲び、ひそかな涙のうちに、

このうつろい易い人生は過ぎていった。  
18年が過ぎても、友もなく、  
生まれた日と同じように、独りぼっち。

ここで用いられている doom は他に10例エミリの詩に見られる。fate, destiny の使用例は14回ある。mourn は35回用いられ、gloom の使用例も際立って多く30回で、形容詞形の gloomy も10例ある。類語についてあげると、grief(s)25回、grieve10回、despair(s)は36回使用されている。sigh(s)の使用例も多く32回みられる。なんとといっても使用例として目立つのは59回使用されている woe(s) と68回使用されている tear(s) である。こうした言葉の使用例からみて、エミリの詩全体の傾向が十分わかる。エミリにとってはこの世はかりそめのものであり、人間の生が本来あるべきところは「永遠」の世界であるという思いが強かったことがうかがわれよう。孤独と絶望を体験せざるを得ないということは、肉体をもって人間がこの世にあるからであり、肉体を離れた魂が到達しうる永生の世界にエミリの意識は常に向けられていたのである。20回用いられている eternity という言葉の使用例がそのことを暗示している。エミリは魂がやがて永生の世界で得られる自由な境地を、moor の自然の生命に触れることで代替体験の如く味わおうとしていたのではなかろうか。それがエミリの魂の自然の生命との融合体験なのであって、詩で歌われているのは自然賛美とは次元の異なるものであった。つぎにあげる詩などはそうした観点から読まれるべきであろう。

The soft unclouded blue of air,  
The earth as golden-green and fair  
And bright as Eden's used to be:  
That air and earth have rested me. (No.99)

穏やかな、雲一つない青い空、  
その昔エデンの園がそうであったように、  
まばゆく輝く緑の、美しい大地。  
その大気と大地が、私に安らぎを与えた。

ここで「その昔エデンの園がそうであったように」という比喻の用い方からも、エミリの憧憬の対象となっていた究極の世界が想像できよう。この詩は1839年4月28日に書かれたものであるが、同年4月20日に書かれた、

The death he took a certain aim,  
For Death is stony-hearted  
And in the zenith of his fame  
Both power and life departed. (No.98)  
その死は、ある確かな狙いを定めていた。  
死は、石のような心をもっているのだから。  
そして、名声の絶頂にあったとき、  
権力と命の両方を見捨てていったのだ。

という詩行と対照して読むと、エミリにとっては、世俗的な価値——権力も名声も富も——そして恋すらも無意味で、魂の自由と喜びだけが価値あるものと考えていたのである。“Emily Brontë’s view of the world is derived in part from her readings in romantic literature and even more from the religious teachings she received in her childhood. But the meaning of her work was also influenced by the very conditions under which it developed.”<sup>(13)</sup> という J. Hillis Miller の指摘もあるように、エミリはロマン派の詩に親しんでいたが、それはワーズワスの自然観とは異なり、自然賛美でもない。エミリの詩を汎神論の見方で理解しようとするのは間違いであろう。既に32頁であげた「私がいちばん幸せな時は」で始まる最後のスタンザでは

When I am not and none beside——  
Nor earth nor sea nor cloudless sky——  
But only spirit wandering wide  
Through infinite immensity. (No.44)  
私が消え、誰もいなくなり——  
大地も海も雲一つない大空も消え——

ただ魂だけが無限の空間を、  
どこまでもさまよう時なのだ。

と歌っていることからエミリが希求して止まらなかった世界が想像できよう。更にエミリはこの詩を書く以前にもつぎのように歌っているのである。

But long or short though life may be  
'T is nothing to eterninty;  
We part below to meet on high  
Where blissful ages never die. (No.41)

しかし、長かろうと短かろうと人生は、  
永遠に比べれば無に等しい。  
私たちは、この世で別れはするが、  
至福の時代が決して絶えることのない天上で再会するのだ。

エミリの心性を理解するうえで、重要なこととしてエミリが故郷を離れるたびに悩んだホームシックのことについては、既に30頁で姉のシャーロットの言葉を引用したが、シャーロット自身がエミリのホームシックの原因となる要因について十分理解していたとは考えられない。仮にある程度理解していたとしても、「縛られない魂」が死後に迎えることを希求していたエミリの思いがどれほど強いものであったかは、エミリが死を迎えた時までわからなかったのではなかろうか。エミリの1842年2月から11月までのブルセルでの寄宿学校生活をシャーロットは「妹は内面の苛責と恥辱をもって昔の失敗を思い返し、この第2の試練にどうしても勝ち抜こうとしていました。そしてついに勝ち抜いたのです。しかし、その勝利は妹にたかい犠牲を課しました。妹は辛苦の果てに得た知識を遠い英国の村へ、なつかしい牧師館へ、荒涼としたヨークシャーの丘へもって帰るまで幸福ではありませんで<sup>(14)</sup>」と伝えている。しかし、エミリの心性を知るうえではむしろ「ジュリアンMとA. G. ロシエル」題された詩で、ロシエルの告白という形でエミリの真情が直裁に表現されている詩行に注目すべきだろう。

“Yet, tell them, Julian, all, I am not doomed to wear  
 Year after year in gloom and desolated despair;  
 A messenger of Hope comes every night to me,  
 And offers, for short life, eternal liberty. (No.190)

でも、ジュリアンさま、彼ら皆に伝えて下さい、来る年も来る年も、  
 暗鬱と惨めさ絶望のうちに過ごすのが私の運命でないことを、  
 希望の御使いが、夜毎に私の許にやってきて、  
 はかない命に代えて永遠の自由を与えてくれるのです。

Derek Stanfordは、この詩句に言及して“*No other poem in the English language conveys and describes the mystical experience so consummately as this.*”と述べている。「ジュリアンM. A. とA. G. ロシュル」は「ゴンドル」の核心的部分<sup>(15)</sup>を成すものであり、それはまたエミリが「ゴンドル」に仮託して自己の心情を誠実に吐露している部分でもある。ここでも死後の永生の主題がとりあげられているのだが、それは先に述べたように、エミリの死への意識とむすびついていて、「私の唯一の願いは死の眠りのなかで一切を忘れることです」といった詩句にも端的に表現されている。

ハウースの村人はヨークシャー以外の土地から来たよそ者や、階級の上の者に対しては好意的ではなかった。したがってブロンテ家の子供達は、牧師館の背後に続く荒野を雨の日も風の日も歩き回ることが日課となっていたという。隣人ともほとんどつき合うことのなかったブロンテ家の子供達、とりわけエミリにとって荒野が特別の意味を持つことになったことは先に述べた。荒野の自然の様相はエミリの詩に歌われ、小説『嵐が丘』にも描かれているが、荒野の草花としてヒースの他にサクラ草、水仙、野バラ、鳥はヒバリ、駒鳥、ツバメなどへの言及がある。彼女の詩では既に述べたようにheathが10回、heatherが3回使用例がある。また、wind(s), storm(s), breeze(s)の使用例が多く、特にwind(s)は55回使用されている。荒野での体験はエミリにとって単なる自然との触れ合い以上のものであった。とりわけ荒野での散策で印象深い体験となったのは荒野を吹き渡る風であったと思われる。したがって、荒野の風はエミリに特別のヴィジョンをかき立てるものであったに違い

ない。先ず初期の詩からその例をあげるとつぎのような詩句がある。

If the wind be fresh and free,  
The wide skies clear and cloudless blue,  
The woods and fields and golden flowers  
Sparkling in sunshine and in dew,

Her days shall pass in Glory's light the world's drear desert  
through. (No.2)

風がさわやかにのびやかに吹き、  
空が晴れわたり、雲ひとつない青空が広がり、  
森と野原と黄金色の花々が、  
日差しうけて、露にぬれて輝けば、その幼な子の生涯は、  
至福に包まれ、世の荒涼とした砂漠を過ぎていくことになり  
ましょう。

High waving heather, 'neath stormy blasts bending,  
Midnight and moonlight and bright shining stars;  
Darkness and glory rejoicingly blending,  
Earth rising to heaven and heaven descending,  
Man's spirit away from its drear dungeon sending,  
Bursting the fetters and breaking the bars. (No.5)

嵐のような突風になぎ倒されながら高く波打つヒース、  
真夜中、月の光と燦めく星、  
暗闇と栄光は喜び溶け合う。  
大地は天に上り、天は下り、  
人間の魂は陰鬱な牢獄から解き放たれ、  
足枷を砕き、牢格子を破る。

There is no snow upon the ground,  
No frost on wind or wave;  
The south wind blew with gentlest sound  
And broke their icy grave. (No.10)

大地の雪も消え、  
風にも波にも霜のような寒さもなかった。  
南風がこの上もなくやさしい音をたてて吹き、  
氷の墓を砕いてしまった。

風はやがてエミリの詩では彼女独特の象徴的意味をもつようになる。  
たとえばNo.44にみられるように自由の息吹の象徴性が明確となり、晩  
年の詩ではつぎのような例を見ることができる。

Yet as the west wind warmly blew  
I felt my pulses bound anew, (No.192)  
だが、西風が暖かく吹きはじめたとき、  
私は、脈拍が新たに脈打つのを感じた。

このような風の扱い方は、小説『嵐が丘』でもみることができる。病  
床にあってキャサリンは荒野の自然に格別の思いをこめて「……雪ど  
けのさわやかな風や、暖かい日差し、それにほとんど融けてしまった雪  
を思いだすわ。エドガー、もう南風が吹いて、雪はあらかた融けてやし  
なくて？」と夫エドガーに話しかけると、これに答えてエドガーはつぎ  
のように言っている。

“The snow is quite gone down here, darling,” replied her  
husband; “and I only see two white spots on the whole range  
of moors : the sky is blue, and the larks are singing, and the  
becks and brooks are all brim full. Catherine, last spring at  
this time, I was longing to have you under this roof, now, I  
wish you were a mile or two up those hills: the air blows so  
sweetly, I feel that it would cure you.”<sup>(17)</sup>

これは前掲のNo.10の詩句を読者に思い出させる部分でもある。また  
キャサリンが錯乱状態のなかで「あの丘のヒースのなかへ、一度でも行  
けたら、もとのあたしにかえれると思うけれど……もう一度、いっぱい



に窓をあけて、あけたままにしておいて<sup>(18)</sup>」と叫ぶが、ここでキャサリンが求める荒野の風のもつ象徴性は明白である。

以上述べてきたように、エミリーの詩を特徴づけているのは彼女の死生観であり、そのことがエミリーをして自分を異質な人間としての自覚を強めることにもなった。J. Hillis Millerが“Emily Brontë”'s poems provide the best glimpse of the quality of her visionary world.”と述べているように、エミリーの詩を読む時われわれはエミリーの独自のヴィジョンに触れることができるのであるが、それは死についての観照を通して得たもので、彼女の霊的な体験をともなったものであろう。エミリーにとっては死後に魂が迎える生は地上にあっての生とは異質のものであり、死後の輝かしい生があり得るからこそこの世での生に耐えうるものとなっていたのである。このようにしてエミリーが最終的に到達したエミリーの孤高の精神は1846年6月2日書かれた詩に示されている。

No coward soul is mine  
 No trembler in the world's storm-troubled sphere  
 I see Heaven's glories shine  
 And Faith shines equal arming me from fear. (No.191)  
 私の魂は怯懦ではない、  
 この世の嵐にまどわされる領域で震えおののく者でもない、  
 私には天の栄光が輝くのが見える、  
 信仰も同じく私を恐怖心から護って輝く。

エミリー・ブロンテの詩を考えると、とりわけ自己告白的な詩について宗教詩のジャンルに含めたり、いわゆるエミリーの神話的世界という表現で考えようとする研究者もいないわけでないが、エミリーが自己の魂に誠実に向き合う姿は、あたかも神の前に跪くような姿を髣髴させる。“To Imagination”ではそうした彼女の真摯な姿勢が素直に表現されている。

I trust not to thy phantom bliss,  
 Yet still in evening's quiet hour  
 With never-failing thankfulness

I welcome thee, benignant power,  
Sure solacer of human cares  
And brighter hope when hope despairs. (No.174)  
私はおまえの見せかけの幸せを信じない。  
だが、それでも夕暮れの静かな一時には、  
尽きせぬ感謝の心をこめて、  
私はおまえを歓び迎えるのだ。恵み深い力よ、  
人間のさまざまな心労を必ず慰めてくれる。  
希望が絶望するとき、一層輝かしく希望となるものよ。

Muriel Spark は“Anne was an orthodox Christian and a moralist: she would disapprove of Emily’s manner of meeting her death;”<sup>(20)</sup>と述べているように、エミリが生涯にわたって書き続けた詩は、宗教的な感情の表現ではなく、彼女の神秘的な体験の記録である。それは彼女独自の想像力、あるいは詩魂とでも表現すべきものが創造した類稀な文学なのである。そのことは一般に神の存在の信仰を述べたものとされる詩句

O God within my breast  
Almighty ever-present Deity  
Life, that in me hast rest  
As I undying Life, have power in Thee. (No.99)  
おお、わが胸のうちなる神、  
永遠にいます全能の神、  
不死の生命である私が、あなたにありて力を得るとき、  
私のうちに安らぐ生命よ。

を理解するうえで重要なことであろう。つまりこの詩の趣意は正統的なキリスト教の神の賛美ではなく、人間と神の関係では、主導権は常に父なる神にあるとする信仰とは異なる信仰体験であり、エミリの意識のなかにもあった死への自覚をともなった信念を述べたものなのである。そのような信念のもとで先に述べたような形で死を彼女は迎えたのであろうし、

書くという営みを通して生を味得し、肉体が与える制約から解放されることを実感しえたのであろう。したがって彼女の遺した詩作は、Gondal sagaといわれる物語の全体性を志向していたものではなかった。書ききれないほどにあふれるヴィジョンを韻文で書き続けなければならなかったエミリにとって「ゴンドル」は、既に述べたように読者を意識して創り上げられたものではなかったものであり、彼女のうたったヴィジョンは彼女自身の内面的体験のなかに照応するものが在ったのだといえるのである。したがって、彼女の詩作は、『嵐が丘』が詩的であると評される<sup>(21)</sup>ような意味での詩とはその原点は違ったものなのである。Winifred Gérinはエミリ・ブロンテの詩のインスピレーションを次のように説明している。

The 'desire', as she repeated often enough in the future, was to be free-free from the trammels of physical existence as a first condition towards attaining complete union with 'the soul of nature', as she sometimes called it, with the life of the universe, or with the Absolute (a term she never used). The ecstasy once achieved, became a permanent craving that no lesser happiness could assuage. . . . her poetry shows that, depending chiefly on her material surroundings and on conditions of almost total solitude, it took possession of her with increasing frequency. There appears to be no indication that these visitations (as they must be called for want of a better word) occurred in childhood and left her permanently desolate by their cessation, as Charles Morgan suggested. Her experiences were in fact different from those of other known mystics like Traherne, Vaughan, and Wordsworth, in this very respect: childhood had for them been the period of greatest revelation. With Emily Brontë, the contrary appears to be true: she was nineteen when at Law Hill. It was only from then on that such manifestations became the purpose and fulfilment of her life, as physical love is to other women. They were the inspiration of her poetry; without them she

was only half alive, and when they ceased altogether she  
died.<sup>(22)</sup>

エミリは正統なキリスト教を生きるよりどころとしていなかった。エミリは彼女自身のヴィジョンに救いを求めたといっている。エミリにとって生きることは死を超越した永遠の生を希求する魂にかかわることであり、その魂が語るべきこと、歌うべきことのみを記すことに徹しようとしたところにエミリの特異性があるといえよう。エミリ・ブロンテのこうした気概は、彼女が死を迎える約6か月前に遺した次の詩句にもこめられている。

There cast my anchor of Desire  
Deep in unknown Eternity;  
Now ever let my Spirit tire  
With looking for *What is to be.* (No.188)

未知の永遠の深き海に、  
私の欲望の錨をおろし、  
私の魂に飽くことなく  
「在るべきもの」を求めさせよう。

【註】

- (1) Winifred Gérin, *Emily Brontë* (Oxford University Press, 1978), p.27.
- (2) Laura L. Hinkley, *Charlotte and Emily* (Kraus Reprint Co., 1970), p.175.
- (3) See *ibid.*, p.176.
- (4) エミリの詩の引用は、C. W. Hatfieldが編集した *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*に依拠した。
- (5) Margaret Lane, *The Brontë Story* (Heinemann, 1966), p.66.
- (6) Charlott Brontë's "Biographical Notice of Ellis and Acton Bell" to *Wuthering Heights* (A Norton Critical Editon, 1985), pp.3-4.
- (7) See Brian Wilks, *The Brontës* (The Hamlyn Pubilshing

- Group Limited, 1989), pp.32-3.
- (8) Edward Chitham は *A Life of Emily Brontë* (Basil Blackwell, 1987) で “We cannot know whether Emily heard her mother raving (though Charlotte’s most famous book hinges on a mad wife rampaging upstairs).” (p.23) と述べている。
  - (9) Elizabeth Gaskell, *the Life of Charlotte Brontë*, chap. VIII.
  - (10) ガストン・バシエラル著 『火の精神分析』 (前田耕作訳 せりか書房) 79頁。
  - (11) Emily Brontë: *Wuthering Heights* (A Norton Critical Edition, 1985), P.134. この囚われの意識について Barbara Prentis は *The Brontë Sisters and George Eliot* (Macmillan Press, 1988年) のなかで “It is not difficult to appreciate why the Brontës should have been so obsessed with the horror of imprisonment, and its symbolic connections with death. Their isolated lives were hemmed in by a graveyard, which was linked in both a practical and imaginative sense with repeated experience of family tragedy.” (p.84) と述べている。
  - (12) ジョルジュ・バタイユ著 『文学と悪』 (山本功訳 筑摩書房) 4頁。
  - (13) J. Hillis Miller, *The Disappearance of God* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1979), p.163.
  - (14) Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (John Lehman, 1947), p.100.
  - (15) Muriel Spark and Derek Stanford, *Emily Brontë* (Peter Owen, 1966), p.225.
  - (16) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, No.34.
  - (17) *Wuthering Heights*, p.114.
  - (18) *Ibid.*, p.107.
  - (19) J. Hillis Miller, *op. cit.*, p.159.
  - (20) Muriel Spark and Derek Stanford, *op. cit.*, p.84.  
Edward Chitham も *A Life of Emily Brontë* でつぎのように述べている。 “On 13 February 1827 Mr Brontë had given Emily a Bible as a present. Compared with Charlotte and

Anne, she was to make little use of it. The dissident Emily has already been noted.” (p.56)

- (21) See Keith Sagan, “Wuthering Heights,” in *The Brontë Sisters* (edited by the British Council, 英潮社新社, 1978), p.54.
- (22) Winifred Gérin, *op. cit.*, pp.86-7.